

(様式2)

平成28年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立大垣北高等学校

学校番号

21

I 自己評価

1 学校教育目標	人間尊重を基調とし、智・徳・体の調和のとれたたくましく豊かな人間性を育み、高い志とグローバルな視野を持って人類・社会に貢献できる有能な人材を育成する。そのため、“誠実・友愛・努力”を本校の生活信条とし、その具現に努める。	
2 評価する領域・分野	◇教務（教育課程・学習指導）	
3 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒対象のアンケートにおいて「熱心に学習指導・生徒指導などに取り組んでいる」「専門的知識が豊富であり、授業内容について信頼できる」「授業の教え方や説明がわかりやすい」のいずれに対しても肯定的評価（A・B評価）が90%弱と評価が高いが、昨年度よりやや低下している点を注視する必要がある。 ・保護者対象のアンケートにおいて「授業をとおして学力が向上するように指導している」に対しては、肯定的評価（A・B評価）が90%超となっており、昨年度よりも上昇している。 	
4 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇生徒の実態に即した授業展開により主体的・意欲的に努力する姿勢を育て、確かな学力の伸長を図る。	
5 重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の相互授業参観や保護者等外部の方の授業参観の実施 ・少人数授業、目的別選択授業の実施 ・週末及び長期休業における計画的な課題の提示 ・個別の補充指導の徹底 	
6 目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
<ul style="list-style-type: none"> (1) 授業評価、外部評価を受けての授業改善 アクティブラーニング型授業の導入 (2) 少人数授業（1年英語、2年数学）選択科目（種目）別授業、目的別授業（3年理系国語、3年数学）の実施 (3) 基本的生活習慣の確立と学習意欲を高めることを目指して、保護者懇談、教育相談週間、1年生への初期指導を実施 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 生徒による授業評価 (2) 生徒及び保護者等による外部評価 (3) 家庭学習時間調査（年間3回） (4) 外部模試による過年度比較 	
8 取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価
<ul style="list-style-type: none"> ・外部評価を7月に実施し、個人、教科、学年で分析 ・授業評価を7月と11月に実施。教科、個人で分析し、授業改善に活用する。 ・学習課題を、教科と学年会が連携して、生徒の実態に応じた内容・量を決定し、目的を生徒に提示した。 ・家庭学習時間調査を4月、6月、11月に実施 学年会で分析し、学習習慣の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ①生徒の授業満足度 ②保護者の授業に対する満足度 ③家庭学習の取り組み状況 ④過年度比較による学力 	<ul style="list-style-type: none"> ① (A) B C D ② (A) B C D ③ A B (C) D ④ A (B) C D
11 成果・課題	<p>○生徒及び保護者ともに本校の授業に対する満足度は高く、生徒の実態に即した授業展開が行われていると考えられる。</p> <p>○授業改善に向けて、生徒による授業評価を受けて教科内での協議を行い、課題の焦点化を図り、後期の授業に取り組んだ。</p> <p>○外部模試等による学力の過年度比較においては、教科・科目での若干の変動が見られたが、全体としては大きな変化がなかった。</p> <p>▲学習時間調査の結果、2年生は前年度よりも学習習慣が定着した生徒が増加したものの、他学年はほぼ横ばい状態であり、家庭学習習慣が身に付いていない生徒を大幅に削減するには至っていない。</p>	
		総合評価 A (B) C D

12 来年度に向けての改善方策案

- ・学力を伸ばすために効果的なアクティブラーニング型授業の在り方を、各教科特性と学年を考慮して検討する。
- ・低学年での家庭学習習慣を定着させるために、各教科において課題の内容や量を吟味する。また、教科バランスについては学年会で検討した上で生徒に提示する。また、生徒へは課題実施の意義や目的を十分伝え、課題実施の状況を把握して生徒の意欲を喚起する指導を丁寧に行う。
- ・大垣北高校として蓄積してきた授業方法や小テスト・課題提示の在り方を、より効果的方法に改善するために各教科会において検討を加え、生徒の実態に応じて見直しを図る。

II 学校関係者評価

実施年月日：平成 29 年 1 月 25 日

【意見・要望・評価等】

- ・先生方に学習についてしっかり指導してもらっているので感謝している。自分の子を見ていると、例えば日本史でも授業をしっかり行っていただき、知識が増え、テスト等でも結果が出てくるので、さらに興味をもつようになる。
- ・学習習慣について、宿題が多いので、慣れる時間がない。読書をする時間、新聞を読む時間がない。特に1年生では、大垣北高校の学習体制に慣れるまでに時間がかかる。
- ・家庭学習がC判定になっているが、学習の習慣が身に付いていないのではなく、設定目標に対する相対的な自己評価ということである。

2 評価する領域・分野	◇研修	
3 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	生徒対象のアンケートにおいて、教職員に対して「熱心に学習指導・生徒指導などに取り組んでいる」の評価が高いものの、それに比べて、悩みや相談事への対応に対する評価はやや低い。	
4 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇人間性を磨き、専門性を高め、教職員の資質向上を目指した研修の充実を図る。	
5 重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・研修係を位置づけ、総合教育センターなどの研修への参加を促す。 ・研究授業や授業評価を実施し、教科会を活発化して、授業改善に努める。 ・進路指導、生徒指導、教育相談、健康促進の各分掌が教職員のスキル向上を目指した研修を計画的に実施する。 	
6 目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標	
(1) 生徒による授業評価と保護者等による外部評価 (2) 研究授業の実施 (3) 保護者による授業参観 (4) 各種研修会の実施	(1) 外部評価 (2) 授業評価 (3) 教員の自己評価	
8 取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒及び保護者のアンケート（年1回7月）と授業評価（生徒）を（年2回7月・11月）実施し、個人・教科・学年・分掌で分析し改善 ・各教科年1回の研究授業を実施 ・教員の相互授業参観期間を年6日間設定 ・保護者の授業参観の機会を年6日間実施 ・進路、教育相談、SGH、救急法などの研修会開催 	①外部評価 ②授業評価 ③教員の自己評価	(A) B C D (A) B C D A (B) C D
11 成果・課題	○生徒アンケートにおいて「熱心な学習指導・生徒指導」で88%、「専門的知識が豊富で、授業内容に信頼」90%、「授業の教え方や説明がわかりやすい」で86%、保護者アンケートにおいても「授業をとおして学力が向上するように指導」の項目で91%の高い評価を得ている。 ○教科毎に設定した生徒による授業評価の評価項目により、教科内での協議が活発となり、授業改善を恒常的に行うことができた。 ▲生徒への個別対応が可能な昼休みや放課後の時間帯が、部活動の指導や会議・補習等により十分に確保できず、生徒のニーズに十分に答えられていない。	
12 来年度に向けての改善方策案 <ul style="list-style-type: none"> ・外部評価と授業評価を行い、教員個々、教科、学年、学校全体の研修の機会を積極的に設ける。 ・授業研究においても、教科ごとに評価項目を設定し、各教科会で授業改善に取り組むとともに、各教科年1回の研究授業を実施して相互参観を行い、教員個々の指導力の向上に資する。また、来年度は、新たに他教科の授業参観期間を設けて、学校全体での授業力向上を目指す。 ・SGH課題研究に関する外部講師による職員研修や、教育相談や進路研究など生徒の実態に応じた研修会を実施し、教職員のスキル向上に取り組む。 ・職員研修会や会議の内容及び実施時期や時間帯の見直しを図り、生徒への対応が優先できる環境設定を行う。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：平成29年1月25日

【意見・要望・評価等】 <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートで「悩み」とか「相談事」とあるが、時間的なゆとりについての悩みなのか、人間関係の中での悩みなのか、生徒の悩みとは一体何かを知る必要がある。 ・生徒の悩みを聞くために、教員が余裕をもつことが大切である。そのような環境を設定することが重要である。

2	評価する領域・分野	◇総務（育友会・学校行事・国際交流）				
3	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・育友会や学校行事に関して保護者の関心・期待が高く、各種行事への参加率も高い。 ・保護者対象のアンケートにおいて肯定的評価が高い。 				
4	今年度の具体的かつ明確な重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・育友会と学校の綿密な協力によって教育成果の向上を図る。 ・学年育友会において本校教育について理解を深める機会とする。 ・国際交流を円滑に行いグローバルな人材を育成する。 				
5	重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・学年育友会において学年委員・学年会とて協力し内容充実を図る。 ・契約審査会等育友会役員に参加いただき、積極的に意見を求める。 ・学校評議員会の開催で外部委員に本校教育について理解を深めてもらう。 ・国際交流活動の機会や情報を生徒や保護者に提供する。 				
6	目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標				
	<ul style="list-style-type: none"> (1) 生徒による授業評価と保護者等による外部評価 (2) 役員会・実行委員会・学年育友会の開催 (3) 育友会研修会を学年育友会で開催する。 (4) 国際交流に係る講演会の実施 (5) 各種国際交流活動(交流会・留学等)の実施、支援 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 外部評価における評価 (2) 教員の自己評価 				
8	取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価			
	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒及び保護者のアンケートと授業評価(生徒)・学校評議員による評価を実施し、分掌・教科・学年で分析 ・「塵城カレンダー」「育友会だより」の発行等で保護者へ行事予定、学校の近況や進学に関する情報等を伝達できた。 ・国際交流事業に重点を置き、グローバルな人材の育成を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> ①外部評価 ②学校評議員評価 ③教員の自己評価 	<ul style="list-style-type: none"> Ⓐ B C D A Ⓑ C D A Ⓑ C D 			
11	成果・課題	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケートにおいて「学校は、保護者が授業や学校行事等を参観する機会等をよく設けている。」の項目について保護者が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と評価している。 ○高校説明会において多数の中学生・中学校保護者の学校見学があり、積極的に受け入れた。 ▲ふるさと教育週間に開催される各種講演会等に、在校生保護者の参加は多い。講師紹介を充実して行うなどして、より広報したい。SGHの紹介(パネル等)は概ね好評であった。 			<p>総合評価</p> <p>A Ⓑ C D</p>	
12	来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度同様に外部評価と授業評価を行い、教員個々、教科、学年、学校全体の振り返りの場とする。 ・育友会と同窓会の連携を図り、来年度部活動支援を結束して支援したい。 				

II 学校関係者評価

実施年月日：平成29年1月25日

<p>【意見・要望・評価等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の中の様子がわからない。生徒、保護者、学校の関係が、なかなか分かりにくい。このような資料を見て初めて理解できるところがある。 ・大垣北高校はとてもよい学校である。保護者の行事参加が多く、意識がとても高い。 ・育友会についても参加してもらえる保護者が多く、意識が他校と比較しても高い。保護者は学校に協力したいと思っている。学校と連携しながら、保護者が学校のために活躍できる場を作っていきたい。
--

2	評価する領域・分野	◇進路支援（進路指導）		
3	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒対象の①「生徒の将来の希望に沿った具体的な進路指導が行われている」についての肯定的評価、及び保護者対象②「生徒の進路希望に沿った適切な進路指導が行われている」についての同評価がいずれも85% また③「学年育友会等、保護者が必要とする進路情報を提供する場を設けている」については92%であり、生徒・保護者ともに高評価がなされており、本校の進路指導への理解が得られていると思われる。 ・高評価の一方で、特に生徒対象の①への否定的評価が1割存在する。 		
4	今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇キャリア教育を通して、高い志と幅広いグローバルな視野を持って、主体的に進路を選択決定できる能力、進路実現に必要な能力と態度の育成に努める。		
5	重点目標を達成するための校内における組織体制	・進路支援部が各学年会と連絡・連携を図り、3年間を見通した適切な進路行事等を企画、実施する。学年間で進路に関する指導経験を共有し、重点目標の達成を目指す。		
6	目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
	<ul style="list-style-type: none"> (1) 計画的な進路支援・進路学習・進路情報の提供に努め生徒の志望と資質を踏まえ、将来を見据えた適切な進路指導を推進する。 (2) 日常の高いレベルの授業及び平日の補習の実施自習室の開放、土曜日の特別講座の開講 3年生の国公立大学個別学力検査直前までの指導等を通して、進路実現に向けての学力が身に付くように支援する。 (3) キャリア教育を推進し、高い志とグローバルな視野を持つよう、卒業生等による講演会を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 進路希望調査による高い志を持つ生徒数 (2) 補習、土曜特別講座の受講希望者数 (3) 各種講座、ガイダンス等への参加数 (4) 生徒及び保護者によるアンケートの結果 (5) 各種外部模試の受験希望者数 (6) 大学進学人数（東大・京大・国公立医学部医学科20人、難関国公立大50人、全国公立大230人合格） 		
8	取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価	
	<ul style="list-style-type: none"> ・進学講演会、大北先輩講座、学部・学科別ガイダンス、名古屋大学説明会、グローバルセミナー等の実施 ・1年生における進路適性検査の実施 ・東大見学会（1、2年）、京大生との懇談会（3年フィールドワーク）の実施 ・オープンキャンパス、医療看護系等インターンシップへの情報提供、及び参加の勧め ・各種外部模試の受験への勧め ・各学年進路担当者との打合せと学年毎の企画、運営 	<ul style="list-style-type: none"> ①生徒はキャリア教育を通して人生設計を描くことができるか。 ②目標達成に向けて最後まで取り組む生徒を育成しているか。 ③進路支援部と学年会との連携は十分機能しているか。 	<ul style="list-style-type: none"> A B C D A B C D A B C D 	
11	成果・課題	<ul style="list-style-type: none"> ○「進路のしおり」、「進路だより」、進路情報誌の配布、進学講演会、学年集会等を通して、生徒各自の進路意識の高揚を図ることができた。 ○希望者対象の各種外部模試（ハイレベル模試等）の受験者や、東大・京大等の難関大学志望者の増加は、高い志を持つという進路意識の現れと考える。 ○昨年度実施できなかった「高大接続・大学入試改革」に関する職員研修を行い、情報共有・共通理解を図ることができた。 ○学力検討委員会を実施し、外部模試の結果から見える各教科・学年の課題を見出すとともに、次へ繋げる対策を講じることができた。 ▲1・2学年との連携が、やや手薄であった感は否めない。学年との連携強化が課題である。 		総合評価
12	来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・各考査、外部模試の学力分析を通して生徒個々の学力を把握するとともに、教育相談・アンケート・調査等による情報の収集に努め、必要な進路選択の基礎知識やアドバイス、進路目標の達成に必要な学力・技能を知らせていく。そのためにも、外部の各種研究会等に積極的に参加したい。 ・東大、京大をはじめとする難関大学への志望者・合格者を増やすため、全校支援体制の強化、職員間の共通理解に努めたい。 ・各学年との連携を密にするとともに、今後増加する国公立大推薦入試に関する情報の収集提供、推薦入試対策、及び大学入試改革への対策を構築したい。 ・「進路だより」を計画的・定期的に発行し、さらなる進路支援情報の提供に努めたい。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：平成 29 年 1 月 25 日

【意見・要望・評価等】

- ・データから見ても、成果が十分に納得できる。
- ・「生徒の希望に沿った進路指導がなされている」に対して否定的な意見が 1 割ある。その理由を今後把握していく必要がある。
- ・教員が多忙で、余裕をもって生徒と接することが難しくなっている。生徒とのコミュニケーションの時間を増やす必要がある。生徒に安心感を与える必要がある。

2	評価する領域・分野	◇生徒指導		
3	現状・生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	生徒・保護者対象のアンケートでは「マナーや社会規範」「服装・頭髪」「交通事故」「いじめ」「体罰」「情報モラル」の指導のいずれについても約80%以上の肯定的評価が得られ、本校の生活指導に対して高い理解が得られていると考えられる。しかし、ボランティアに関する評価がやや低い。保護者の「わからない」という回答の多さを含め、広報の必要性を感じる。また、特に「交通安全」や「いじめ」に関しては、折を見て繰り返し指導していく必要がある。		
4	今年度の具体的かつ明確な重点目標	自ら考え判断し、他を思い、不屈でたくましく豊かな人間性を備えた心身共に健全な生徒の育成をめざします。また、生徒の自主的な活動を通して、友愛に満ちた校風をつくります。		
5	重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> ・教務部や健康促進部、学年会、生徒会、生活安全委員会との連携体制 ・警察、育友会との連携体制 		
6	目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 生活充実講話として「交通安全」「情報モラル」「性」「薬物」「人権」に関する講話や携帯電話に関するLHRを通して、人権及び生命を尊重する意識や社会人になるためのモラルの育成を図ります。 (2) 身だしなみ指導、登校指導、交通安全啓発活動及び挨拶運動を通して、規範意識や交通安全意識の高揚を図るとともに、思いやりとしてのマナーの育成・向上を図ります。 (3) 部活動や生徒会活動を通してたくましく豊かな人間性を養うとともに、他学年との人間関係を構築します。		(1) 「生徒実態調査」(6月・11月実施)、「生徒及び保護者によるアンケート」の結果で達成度を判断する。また、講話後の感想文等で心の成長を確認する。 (2) 「生徒及び保護者によるアンケート」のルール、服装の項目の結果で達成度を判断する。 (3) 「生徒及び保護者によるアンケート」の部活動、学校行事、生徒会活動の項目の結果で達成度を判断する。		
8	取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価	
①・外部講師を招いて各種講演会を実施 ・携帯LHRを年間行事に位置づけ、1・2年生に実施 ②・職員による毎朝の交通安全指導とMSリーダーズによる月2回の交通安全および挨拶運動を実施 ③・生活安全委員会と連携しながら、自主的、積極的な活動を奨励 ・年3回の校外清掃、月2回の校門周辺の清掃活動を実施 ・学校祭において、熊本地震を受けた防災に関する企画を作成・発表		①生徒の内面に訴えかける講演、LHRであったか。生徒の通学実態、携帯等の使用実態が適切であったか。 ②生徒の通学状況・身だしなみが向上したか。挨拶が飛び交うようになったか。 ③部活動・学校行事への積極的に参加する割合は高いか。活動を通して様々な交流ができたか。	(A) B C D A (B) C D (A) B C D	
11	成果・課題	○どの講演も狙いが生徒にしっかりと伝わっていると判断できる感想が多かった。 ○学校周辺では一旦停止・左右確認・左側通行など交通ルールを遵守する姿が多く見られた。また、並列運転への苦情も減少した。 ○部活動や学校行事に積極的に打ち込む姿が多く見られ、技術のみならず規律についても生徒同士で高め合おうという意識が感じられる。 ▲今年度の交通事故は26件で、昨年度比6件増(12月末現在)であった。車側の過失が大きいと思われる事故が多いので、ドライバーとのアイコンタクトの必要性を強く訴えていきたい。 ▲SNS等での情報モラル違反はほとんどないが、非公開のSNS等でのトラブルやスマホ依存が心配である。		総合評価 (A) B C D
12	来年度に向けての改善方策案	・今年度と同様に生活安全委員会や育友会、外部機関(警察・交通安全協会)とも連携し、様々な場面で交通安全教育を推進していく。職員による毎朝の交通指導や生徒による月2回の交通安全運動は継続して実施し、『交通事故ゼロ』を目指した交通事故防止運動をより一層強化する。 ・身だしなみやマナーに関する指導については現在の取り組みを今後も継続するとともに、交通安全指導、情報モラル指導等を通して、他者への配慮等、人権意識についての指導も共通認識をもって全職員で実施していく。		

II 学校関係者評価

実施年月日：平成 29 年 1 月 25 日

【意見・要望・評価等】

- ・アンケートを見ていると、学校の近くでは交通ルールを守っているが、遠くでは守っていないと答えている生徒がいる。事故が起きては大変なことになる。引き続き指導をお願いしたい。
- ・家庭での親子のコミュニケーションはどの程度できているのか。生徒がスマホを使う時間が増えていることがとても気になっている。現状を変えていく必要がある。今後とも指導をお願いしたい。

2	評価する領域・分野	◇生徒（特別活動）		
3	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の評価において、生徒会活動・部活動の項目ではA、Bの割合が高い。しかし「LHRの時間が今後の自分に有意義なものになっている」「学校行事が充実している」の2つの項目についてはAの割合が少ない。LHRや学校行事の運営について考え直す必要がある。 保護者の評価では、どの項目も昨年度に比べ、Aの評価を多くいただいている。しかし、ボランティア活動においては、まだまだ課題が山積している。より一層の呼びかけや活動報告を充実させる必要がある。 		
4	今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇学校の一員としての自覚を深め、生徒会活動を通して学校づくりに積極的に参加する態度を養成する。 ◇生徒一人一人の個性を生かした生徒会活動を目指す。生徒から出た意見を生徒会活動に反映させる。 ◇他の分掌や部活動等と連携をとったボランティア活動を目指す。		
5	重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> 各種委員会活動が積極的な取組になるための支援。 全職員に対し、生徒会執行部の考えを説明し、理解と協力を求める。 校内放送や生徒会機関誌などを通じて広報活動を強化する。 		
6	目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 学校行事へ生徒一人一人が意欲的に参加するために意見箱の活用やアンケート調査をする。 (2) 校内放送や生徒会機関誌『北高街道』などを活用し、生徒会の活動を校外に広報する。 (3) 人権活動に関連したボランティア活動を行う。 (4) LHR実践例の紹介。		(1) 女子生徒着用の冬場の黒タイツ導入の実現。 (2) 生徒会機関誌『北高街道』の発行数やその内容 (3) 人権活動にかかわるボランティア活動の具体的実績 (4) LHRにおける研究授業の実施		
8	取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価	
<ul style="list-style-type: none"> 生徒会執行部がまとめた黒タイツ導入に関する意見書を生活充実部に提出。また、全校生徒に導入の経緯の説明や着用の仕方についての呼びかけを行った。 経年研修にてLHRの研究授業を行う教師に対する授業立案・授業後講評を行った。 ボランティア活動としてペットボトルのキャップ集めを行った。 校内放送や生徒会機関誌などを使って、校外に対し、生徒会活動を広報した。 		①生徒が主体的に生徒会行事に取り組むことができたか。 ②年間計画に従って、LHR活動に取り組むことができたか。 ③ボランティア活動への参加と広報を行うことができたか。	(A) B C D A B (C) D (A) B C D	
11	成果・課題	総合評価		
○今年度もペットボトルキャップの売却による利益を認定NPO法人「世界の子供にワクチンを」日本委員会を通して、東南アジア諸国にワクチンを寄付する活動を行った。全校に呼びかけ、各クラスで回収されたペットボトルキャップの総数は1万6千個を超えた。 ○学校行事ごとに活動内容をホームページに掲載することができた。また、生徒会機関誌『北高街道』や昼休みに放送している生徒会アワー「北高タイムGO! GO! GO!」等において、民族問題・政治問題を抱えている東南アジア諸国の現状を紹介し、生徒一人一人が世界に向けて何ができるのか考えるきっかけを作ることができた。 ▲今年度もLHRノート「青春を探求しよう」の利用が少なかったようである。また、担任独自のアイデアを生かしたLHRの実践例は、昨年度よりは増えたように思われるがまだまだ少ない。今までのLHRの成功例を調査し、担任に伝えていく必要がある。ただし、今年度は、クラス独自のLHRの時間が例年より少ないという物理的な問題があった。		A (B) C D		
12	来年度に向けての改善方策案 <ul style="list-style-type: none"> LHRノート「青春を探求しよう」活用例や担任独自のアイデアを生かしたLHRの紹介 担任同士の実践例交流を行う。 人権活動に関連したボランティア活動の拡充。 			

II 学校関係者評価

実施年月日：平成29年1月25日

【意見・要望・評価等】

・私たちの事業所のボランティア活動に、年3回も大垣北高の生徒たちに参加してもらっている。また、私たちも北高祭にも参加させてもらっている。とても感謝している。

2	評価する領域・分野	◇健康促進（健康・安全教育）		
3	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果より、生徒の81%は、地震・台風などの対応マニュアルを理解しているようであるが、「A：よくあてはまる」が減少している。 掃除が行き届いていると感じている生徒が、若干減少している。 		
4	今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇非常変災時におけるマニュアルを生徒に配布・説明し、命を守る行動ができるよう徹底を図る。 ◇校内をきれいにする意識を指導していく。 ◇自分の健康管理ができる。（生徒、職員）		
5	重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> 避難マニュアルを配布・説明し、理解させる。 校内でゴミを出さない指導ときれいにする意識を高める。 保健室を有効活用し、健康状態を把握する。 		
6	目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
	(1) LHRや命を守る訓練で、避難マニュアル等配布・説明し、理解させる。 非常災害時、各種警報発令時における非常食・水等を全校生徒分備蓄する。 (2) 平常掃除を中心とした指導の徹底を図る。定期的な安全点検のみだけでなく、平常時も意識する。 (3) 「健康通信」による先読みした情報の提供により、予防を主眼においた健康指導を図る。	(1) 非常災害時、各種警報発令時の備蓄品の使用方法が理解できたか。 (2) 校内美化を意識しゴミを減らすことができたか。きれいにする意識が持てたか。 (3) 自らの健康管理を予防の観点から行動できたか。		
8	取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価	
	<ul style="list-style-type: none"> 非常災害時、各種警報発令時に必要とされる備蓄品を完備しておく。使用した場合は直ちに補充する。 ゴミの分別減量においてゴミの集積庫における指導及び全職員による呼びかけをする。 感染症等の職員の共通理解と組織的な対応を図る。 	① 非常変災時の備蓄は最低限あるか。 ② ゴミの分別減量はできたか。 ③ 職員の感染症に対する警戒心ができたか。	A (B) C D A (B) C D (A) B C D	
11	成果・課題	○非常変災時における備蓄品、本校が避難所になった場合の運営機材は完備できたが、あくまでも生徒・職員の3日分にすぎないため、その後の運営については、県・大垣市と連携し、不足分を補充する。 ○熱中症や感染症に対して、予防を前提に行動する生徒・職員が増えた。今後も治療より予防を大切にしたい指導を心がけていきたい。 ▲生徒の掃除をする姿勢はできているが、きれいにできていない箇所があるため、監督の職員の意識も高めていく必要がある。ゴミの減量化が進んでいないのが現状である。		総合評価 A (B) C D
12	来年度に向けての改善方策案 <ul style="list-style-type: none"> 「健康通信」を中心に、熱中症や感染症に対して、予防を前提に行動する生徒・職員が増えるよう取り組み、早期な対応ができるようにする。 生徒・保護者・地域住民へ防災マニュアル・避難所開設、運営マニュアルの簡易版を配布、説明をして実際に起こった場合に迅速に、慌てず行動できるよう準備しておきたい。 			

II 学校関係者評価

実施年月日：平成29年1月25日

【意見・要望・評価等】

・非常時のことについて、設備を整えてもらっている。地域の人々が避難してくることもありうる。さまざまなケースを想定して、万々に備える体制を取っておくとよい。

2	評価する領域・分野	◇教育相談		
3	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> 保護者対象のアンケートにおいて、保護者の74%が「保護者の悩みや相談に適切に対応してくれる」と答え、その割合は昨年度より10ポイント程度増えている。一方生徒対象のアンケートにおいては「悩みや相談事に親切に対応してくれる先生が多い」という問いに対して66%の生徒が肯定的にとらえているが、その割合は昨年度より1ポイントほど低下している。 		
4	今年度の具体的かつ明確な重点目標	教育相談で自立の心をそだてよう ～生徒理解と支援の充実～ ○集団の中での発達支援を通して育てる。 ○学習支援・進路支援を通して育てる。 ○HR活動・特別活動を通して育てる。 ○心理検査等の活用を通して育てる。		
5	重点目標を達成するための校内における組織体制	<ul style="list-style-type: none"> 学年会を中心とする日常の継続的教育相談活動 相談職員と学年連携による定期的教育相談活動 		
6	目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
	(1) 定期的教育相談の実施 (2) 教育相談部による必要に応じた教育相談の実施	(1) 保護者・学校評議員による外部評価 (2) 生徒・保護者によるアンケート集計結果		
8	取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価	
	<ul style="list-style-type: none"> 年間2回の教育相談週間の実施と学年独自の個別懇談の実施。 支援が必要な生徒に対する相談の実施。 スクールカウンセラーの活用 職員研修会の実施 	①担任を中心とする教育相談により早期対応ができたか。 ②担任や学年と係の連携がうまくなされたか。 ③教育相談的能力が向上したか。	(A) B C D (A) B C D A (B) C D	
11	成果・課題	○学年会・担任との連携を密にし、教育相談が必要な生徒に対する早期対応ができた。また、スクールカウンセラーに助けられた場面が多数あった。 ○昨年度から心理テストとして1年生「シグマ」2年生「i-check」を実施した。結果を基にHR担任等とより深い相談できるきっかけとなった。 ▲生徒を多面的に観察し、早期対応に心がけたが、人の心に関する問題の解決は容易ではなく、成長を見守るだけのケースもあった。 ▲大きな問題を抱えた生徒が何人かおり、その対応に労力を割いた結果、それ以外の生徒に対する対応が手薄になってしまった。		総合評価 A (B) C D
12	来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> 本校生徒は自立心に富み、悩みも一人で抱え込む傾向がある。その心の問題を早期発見・解決するのは容易ではないが、担任と関係職員の連携を密にし、研修会等により、職員一人ひとりのカウンセリングマインドの深化を図る必要がある。生徒実態調査及び心理検査のさらなる有効活用方法を検討したい。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：平成29年1月25日

【意見・要望・評価等】

- 生徒の心の悩みは深いものがある。生徒には挫折は早いうちに経験してもらいたい。先生方には、生徒が挫折を乗り越える力を育ててもらいたい。自律できる生徒が育つと思う。
- 学校のすぐ近くに住んでいるので、生徒を温かい目で見守っていきたいと思っている。

2 評価する領域・分野	◇図書情報館		
3 現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒対象のアンケートにおいて「生徒に適した進路情報を示し、生徒の可能性を引き出そうとしている。」という項目では約85%の生徒が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答しており、前年度との変化はほとんどない。図書情報館からも進路情報に関する広報を更に図り、進路指導をサポートしていきたい。 ・生徒対象・保護者対象のアンケートにおいて、「施設・設備は、学習環境の面でほぼ満足できる」の項目では、生徒の92%、保護者の98%が「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答し、前年度より微増である。図書情報館も生徒、保護者にとって満足できる場になるよう、努力を怠らないようにしたい。 		
4 今年度の具体的かつ明確な重点目標	◇館内展示の工夫やPOPの作成など、図書委員会の活動の推進 ◇新着図書案内などを利用した広報活動の活発化 ◇関係資料の提供による授業・SGH・大学受験への支援		
5 重点目標を達成するための校内における組織体制	・図書情報館部の中に、読書指導、管理調査、利用指導、資料、視聴覚授業支援の各係を作り、重点目標を達成するための担当者をおいた。		
6 目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標		
(1) 館内展示POPの作成など、図書委員会の活発な活動を支援する。 (2) 新着図書案内の実施、読書週間の放送による朗読など、広報活動を充実させる。 (3) 資料等の提供の便宜を図ることにより授業及び面接・小論文対策、SGHの支援を行う。	(1) 図書委員一人ひとりが自覚を持って取り組み、生徒だけでなく、保護者にも図書委員会活動に関心を持ってもらえたか。 (2) 生徒の興味関心を深めることができ、図書情報館利用の推進ができたか。 (3) 生徒の購入希望などに応えることができたか。		
8 取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価	
<ul style="list-style-type: none"> ・貸出カードの作成や「私の好きな一冊」の展示を実施。生徒や保護者、先生方に図書情報館に足を運んでもらう一助とした。 ・学校行事に対応した本や卒業生の本の紹介をする展示スペースを活用した。 ・1、2年生に読書感想文指導を行い、県の読書感想文コンクールに参加。自由読書部門で優秀賞を受賞した。 	①重点目標達成に意欲的に取り組むことができたか。 ②生徒や保護者の要望に適切に対処することができたか。 ③課題に対して、組織的に取り組むことができたか。	A (B) C D A (B) C D A (B) C D	
11 成果・課題	○図書選定委員会に保護者の方に参加していただき、保護者目線のご意見をいただくことができた ○生徒の興味・関心を高めるための広報活動を推進し、生徒の力を活用した委員会活動の充実ができた。 ▲検索コンピュータ廃棄によって生まれたスペースを有効に活用することができなかった。		総合評価 A (B) C D
12 来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の読書意欲を掻き立てるよう、10月に実施した「統一LHR 読書の秋」の継続、広報活動の工夫に取り組んでいきたい。 ・図書情報館内のスペースの利用法、書籍の示し方等を工夫し、図書情報館が情報センターとしてより機能できるようにしたい。 		

II 学校関係者評価

実施年月日：平成29年1月25日

【意見・要望・評価等】

・子供たちは部活動や塾があり、家庭で過ごす時間が少ない。子供たちにとって、高校の中で過ごす時間はとても長い。北高の先生方や行事、施設等の学習環境の中で3年間過ごせるのはとても素晴らしいことである。保護者としては家庭で子供に接する短い時間を大事にしたいと感じた。

2	評価する領域・分野	◇SGH推進				
3	現状、生徒及び保護者等を対象とするアンケートの結果分析等	◇生徒意識調査（1月中旬実施）：将来、3か月以上の留学をしたいと考えている生徒が半数近くいるなど、国際社会に対する意欲が向上した。 ◇保護者アンケート（1月下旬実施予定）： ◇教職員アンケート（1月下旬実施予定）：				
4	今年度の具体的かつ明確な重点目標	【1年生・SGH課題研究1】 ・グローバルな諸課題に対する興味・関心を喚起する。 ・課題発見力・課題設定力を身に付けさせる。 ・他者と協力して課題解決を図る方法を身に付けさせる。 【2年生・SGH課題研究2】 ・多面的なものの見方・考え方を身に付けさせる。 ・論理的な思考力・表現力を身に付けさせる。 ・多様な文化や価値観を理解し、国際社会に貢献する意欲を喚起する。 【1・2年生共通】 ・高いコミュニケーション力（日本語・英語）を身に着ける。 【3年生希望者・SGH課題研究3】 ・高い英語運用能力を身に付けさせる。 ・ディスカッション、プレゼンテーション等を通じた表現力、発信力を身に付けさせる。				
5	重点目標を達成するための校内における組織体制（校外連携を含む）	・企画委員会・職員会議を通じたSGH事業への全職員の共通認識の醸成 ・学年会との連携（意見吸収と「SGH課題研究」推進に関する意思疎通） ・各教科のSGH化に向けた教科会との連携強化 ・地元グローバル企業のSGH事業に対する理解と協力の取り付け ・グローバル化を図る大学・学部に対する理解と協力の取り付け				
6	目標の達成に必要な具体的な取組	7 達成度の判断・判定基準あるいは指標				
	(1) 「SGH課題研究1」（2単位）の実践 (2) 「SGH課題研究2」（2単位）の実践 (3) 「SGH課題研究3」（1単位）の実践 (4) 言語技術指導の実践（日本語） (5) 英語授業改善の実践 (6) 各種会議におけるSGH事業の発信 (7) 「SGH通信」等を通じた積極的な広報活動 (8) 海外フィールドワーク等外部訪問事業の実施 (9) 企業連携・高大連携の推進	(1・2) 生徒意識調査・保護者アンケート 教職員アンケート・各事業評価（生徒） (3) 生徒アンケート等 (4) 生徒アンケート、外部検定試験結果 (5) 教職員アンケート (6) 教職員アンケート・マスコミ報道回数 (7) 生徒アンケート等 (8) 外部（企業・大学教官・留学生）講師来校回数等				
8	取組状況・実践内容等	9 評価視点	10 評価			
	・「SGH課題研究1・2」（1年生・2年生）の全 員対象実施 ・「SGH課題研究3」（3年生希望者）の実施 ・言語技術指導・英語授業改善の実践 ・SGH事業実践の校外外への広報 （「SGH通信」や新聞報道等マスコミへの広報） ・外部機関（企業・大学・国際機関等）との積極的な 連携	①生徒はグローバル人材としての の能力を身に着けることが出来 たか。 ②SGH事業の目的や内容が的確 に伝わり、理解が得られて いるか。 ③SGH事業に、多くの人材が 意欲的に関わっていただけ ているか否か。	A (B) C D A (B) C D (A) B C D			
11	成果・課題	○生徒は、グローバル社会への興味・関心を高めており、留学への意欲を示す生徒が増えている。こうした意識は、保護者の意識にも変容をもたらしている。 ○教職員の中に、教職員間及び外部の人材と協働して、グローバル人材を育成しようとする意識が高まっている。 ▲教科のSGH化については、全校（全教科）規模での実施とはなっていない。 ▲「SGH課題研究」における研究提案が漠然とした内容にとどまっている生徒が多い。			総合評価 A (B) C D	
12	来年度に向けての改善方策案					
	・「SGH課題研究」での成果を深化させるため、グローバル課題に対する知識獲得機会を意図的に増やす。 ・「SGH課題研究」において、生徒の表現力・発信力の更なる育成に向けた取組の充実を図る。 ・教科会との連携を強化して、「アクティブラーニング」の研究及び教科のSGH化を推進する。					

II 学校関係者評価

実施年月日：平成 29 年 1 月 25 日

【意見・要望・評価等】

- ・保護者の立場から言うと、子供が大垣北高校に入ってとてもよかったと思っている。カンボジアにも行かせてもらい、中学では海外に興味がなかったのだが、留学に興味を持ち始めた。大学に行ってから留学することも考え始めている。大垣北高校の教育活動に感謝している。